

故後町幸雄さんの御業績を偲んで

京都大学防災研究所助教授であった故後町幸雄さんは、同研究所附属防災科学資料センターが新設された昭和47年の6月以来12年間余にわたって、きわめて健康で、研究所内外の防災科学資料の収集・整理・解析という重要な任務に専念され、全国の災害科学研究者から厚い信頼を受けて居られましたが、昭和59年8月19日に急逝されました。ここに、その御生涯を振り返り、御業績の跡を辿って御冥福を祈りたいと思います。

後町さんは昭和8年8月10日に長野県諏訪市に生まれ、27年3月に長野県立諏訪清陵高等学校を卒業するまで諏訪で幼年期・少年期を過して来られました。幼少期はかなり活潑で暴れん坊の一面もあったとのことですが、高校時代にキリスト教に惹かれ、卒業の頃に洗礼を受けられ、多くの人達が知っている後町さん像が次第に形成されて来たようです。大学に入ってから京都周辺の生活がつづくわけですが、昭和33年3月には京都大学理学部地球物理学科を卒業、つづいて35年3月に大学院理学研究科修士課程を修了されました。その間、故滑川忠夫教授をはじめ山元龍三郎・光田寧両博士の指導を受け主として大雨発生のメカニズムについて研究をされました。

昭和35年4月には気象庁に就職し、大阪管区気象台で観測課に1年1ヶ月、予報課に2年1ヶ月在籍して、気象業務の実務を習得されました。特に、当時開発途上にあったレーダー気象解析や数値天気予報の予報現業への導入に若い情熱を注がれました。

昭和38年7月には再び山元教授に請われて京都大学理学部に助手として戻り、気象学の教育と研究の任につかれました。この頃には大雨のメカニズムの一分野である雷雲の構造の研究を、小型レーダーやミリ波レーダーを用いて行ない、関連して雷雲中の電場の研究を電磁気学研究室の故田村雄一教授・小川俊雄講師に協力して始められました。これは最近高杉年且君らと共に防災研究所でさらに進められました。

後町さんはこのような気象学の研究と併行して、昭和29年京大に入学して以来、京都大学キリスト教青年会に所属して友人や後輩の世話に当り、後に副理事長の要職につかれました。大学紛争はこの会にもいろいろ影響を与え、当時の苦労は大きかったようです。同時に、昭和38年に京大へ戻ってからは改革派京都教会に所属し、40年には日本基督教会吉田教会に所属し、2年後には長老に推挙されて、教会の発展に努力されました。

またスポーツも得意で、諏訪湖でできたアイススケートをはじめ、バスケットボール、ソフトボールなど何でもこなし、毎日縄飛びで身体を鍛えておられたのに、このように早く亡くられるとは信ぜられません。レコードを聞くのも好きで、ロック音楽特にバッハの曲を好んでおられました。

昭和41年4月、京都大学防災研究所に災害気候部門が誕生し、中島教授、樋口助教授、後町、田中助手でスタートしました。後町さんは降雨の研究を担当されましたが、丁度その頃に国際水文10年計画(IHD)の国内計画の一つとして鈴鹿山系に降る地形性降雨の研究を始めることとなりました。御在所山を中心として



密な雨量観測網が出来たのは昭和42年でしたが、以後実に17年間も暖候季の鈴鹿山脈の雨の観測をつづけ、後町さんならではの貴重で膨大な資料を残されました。山岳性降雨の山頂付近の分布と大気成層条件に関する多くの論文をこの成果に基いて発表しておられます。

昭和44年10月には石原安雄教授に請われて水文学部門に助教授として移り、降雨現象を気象学の立場に限らず水文学の立場から一貫して研究を進められました。この頃から雨滴の粒度分布の自動計測装置の開発試作に着手され、山岳降雨中の雨滴の分布の研究、さらに後年にはレーダーによる雨量測定の精度向上を目指し、これは後町さんが亡くなる時にも、早く元気になって続けたいと切望しておられた仕事でありました。

昭和47年6月、防災研究所附属防災科学資料センターが出来ると同時に、同センターの初代専任助教授に転じ、研究所内の防災資料の収集・解析だけでなく、全国の自然災害科学資料のまとめ役として、誠実かつ精力的に活動してこられました。文部省科学研究費自然災害特別研究総合班でも、歴代の代表者の補佐役として、各種会合の準備や報告書のとりまとめなどの地味な仕事を黙々とつづけられ、全国の研究者から感謝されております。災害に関連した写真資料の収集、整理も後町さんの労に負うところが大きいです。各地で突発災害が発生する度に現地調査に出かけ、多くの報告書にその名前を見ることが出来ます。災害資料と文献の大型計算機による検索のための基礎作業は最近の資料センターの大きな仕事であり、この大変な仕事にも後町さんは情熱を注いでとり組んで居られました。

昭和51年からは高槻に住まれ、3人のお子さんの良き父であると共に、日本基督教会高槻教会に所属され、多くの信者の方々からも良き指導者として、また「雨博士」として尊敬を受けて居られました。

このように大学の内外で元気に活躍して居られた後町さんが身体に異常を感じられたのは昭和59年の初夏のことでした。入院して直腸がんであることがわかった時は既に遅く、8月19日に心呼吸不全におちいり、51歳の若さで帰らぬ人となりました。周囲の人達は勿論、本人さえも一時の入院と信じ、秋の鈴鹿の観測を楽しみにして居られました。入院前日、仕事の準備に研究所内を走り回って居られた姿が眼に浮びます。雨滴計の開発をはじめとして、後町さんの残された仕事は次の世代の人たちに引きつがれることでしょう。わが国の自然災害科学の発展にとって誠に惜しい人を失ない、哀惜の念にたえません。

(中島暢太郎記)

後町幸雄氏 研究業績

発表年	題 目	発 表 誌 名	共 著 者
1960	下層ジェット流の存在を梅雨末期の豪雨発現の 気象条件として導入する必要性について	修士論文（未公表）	
1965	ミリ波レーダの観測による雲及び降水形態	気象研究ノート第16巻第1号	
1967	Potential Gradient and Radar Echoes from an Isolated Thunderstorm	Special Contributions, Geophysical Institute, Kyoto University, No. 7	Ogawa, T.
1968	近畿地方南部の降雨について	京都大学防災研究所年報第10号 B	
	昭和42年7月豪雨の特性について	京都大学防災研究所年報第11号 B	
	近畿地方南部の降雨について（第2報）	京都大学防災研究所年報第11号 B	
	昭和42年7月豪雨の気象特性	昭和42年度文部省科学研究費特定研 究	中島暢太郎
	On the Heavy Rainfall in the Kinki District (Western Japan)	Bulletin of the Disaster Preven- tion Research Institute, Kyoto University, Vol. 17	Nakajima, C.
1969	近畿地方南部の降雨について（第3報）	京都大学防災研究所年報第12号 B	
	豪雨の研究（Ⅰ）	京都大学防災研究所年報第12号 B	中島暢太郎・荻本 洋
1970	豪雨の研究（Ⅱ）	京都大学防災研究所年報第13号 B	中島暢太郎
1971	水災害の科学	技報堂	矢野勝正 編
	鈴鹿山脈周辺の降雨について	京都大学防災研究所年報第14号 B	中島暢太郎
1972	光を用いた雨滴計	天気第19巻10号	
	豪雨の研究（Ⅳ）—豪雨時の10分間雨量の解析—	京都大学防災研究所年報第15号 B	中島暢太郎・枝川尚資
	Heavy Rainfall around the Suzuka Moun- tains	Bulletin of the Disaster Preven- tion Research Institute, Kyoto University, Vol. 21	Nakajima, C.
1973	鈴鹿山脈周辺の降雨について(2)	京都大学防災研究所年報第16号 B	
	種々のスケールの気象現象と水災害	京都大学防災研究所年報第16号 A	中島暢太郎
1974	豪雨のスケールと土砂災害	自然災害資料解析第1号	奥田節夫・芦田和男・ 奥西一夫・沢田豊明・ 横山康二
1976	豪雨の規模と平均雨量および集中度について	自然災害資料解析第3号	中島暢太郎・石原安雄
	雨滴粒径の測定	気象研究ノート第130号	
1977	琵琶湖周辺の気象(1)	京都大学防災研究所年報第20号 B-2	中島暢太郎・井上治郎
1978	鈴鹿山脈周辺における集中豪雨	文部省科学研究費，自然災害特別研 究成果 No. A-53-4	
	尾鷲における降水の粒径分布と電気的特性	文部省科学研究費，自然災害特別研 究成果 No. A-53-4	高杉年且
	山岳降雨の数値実験	文部省科学研究費，自然災害特別研 究成果 No. A-53-4	
	Numerical Experiment of Orographic Heavy Rainfall due to a Stratiform Cloud	Journal of the Meteorological Society of Japan, Vol. 56, No. 5	
	Heavy Rainfall around the Suzuka Moun- tains (2) —Synoptic Study—	Bulletin of the Disaster Preven- tion Research Institute, Kyoto University, Vol. 30	
1980	Radar-Echo Structure of Middle-level Precipitating Clouds and the Charge of Raindrops (1) —Processes of Mixing of Precipitation Particles Falling from Gene-	Journal of the Meteorological Society of Japan, Vol. 58, No. 3	Fujiyoshi, Y., Takeda, T., Takasugi, T.

発表年	題 目	発 表 誌 名	共 著 者
	rating Cells— 台風7916号について	京都大学防災研究所年報第23号 B-2	中島暢太郎・光田 寧・ 田中正昭・藤井 健・ 文字信貴
1981	豪雨の時空間分布に関する研究—メッシュ法に よる広域・毎時雨量資料の解析— 琵琶湖流域の降水特性	京都大学防災研究所年報第24号 B-2	友杉邦雄・辻 安治
1982	Electrical Property of Precipitating Clouds —Raindrop Charge-Size Measurement— Statistical Study on the Relations among Characteristics of Rainfall around the Suzuka Mountains and Meteorological Conditions during Warm Season.	水資源研究センター研究報告第1号 Bulletin of the Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University, Vol. 32, Part 1. Journal of the Meteorological Society of Japan, Vol. 60, No. 2	中島暢太郎 Takasugi, T.
1983	昭和57年7月豪雨について	京都大学防災研究所年報第26号 B-2	中島暢太郎・元田雄四 郎
1984	昭和58年7月豪雨の気象特性	文部省科学研究費，自然災害特別研 究突発災害研究成果 No. B-58-3	中島暢太郎
	昭和58年7月豪雨の気象特性	京都大学防災研究所年報第27号 B-2	中島暢太郎